



Title	マレー文学の問題点 : ジャワ文学との比較研究における史的解明
Author(s)	中西, 龍雄
Citation	大阪外国語大学学報. 1961, 9, p. 37-50
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80178
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

マレー文学の問題点

——ジャワ文学との比較研究における史的解明——

中 西 龍 雄

Hal-hal jang mendjadi soal dalam Kesusasteraan Melaju

—suatu uraian bersedjarah pada penjelidikan
perbandingan dengan kesusasteraan Djawa—

NAKANISHI Ryuo

Diantara kesusasteraan-kesusasteraan jang terdapat di Indonesia kesusasteraan jang terkenal dan tinggi nilainja adalah kesusasteraan Melaju dan kesusasteraan Djawa. Berlainan dengan kesusasteraan Djawa, kesusasteraan Melaju biasanja disebut sebagai kesusasteraan Indonesia. Akan tetapi sebenarnja kesusasteraan Indonesia itu terdiri dari kesusasteraan jang dihasilkan bangsa Melaju s / d zaman Abdullah jang berkembang berpusatkan Sumatera dan Malaka dan kesusasteraan sesudah zaman Abdullah jang berkembang pula berpusatkan pulau Djawa. Djadi kesusasteraan jang berkembang di Malaka dan Sumatera s / d zaman Abdullah itulah jang dapat dikatakan kesusasteraan Melaju dalam arti jang sebenarnja. Memang pula pada kesusasteraan Melaju pada zaman itu terdapat pelbagai soal jang sukar sulit baik dalam buah sastra itu sendiri maupun proses perkembangan kesusasteraan itu, kesulitan-kesulitan mana menjebabkan pula kesukaran memahami kesusasteraan Melaju dalam garis besarnja. Untuk mengatasi serba kesulitan dalam mempelajari kesusasteraan Melaju sebelum zaman Abdullah, dibawah ini saja akan mentjoba membentangkan perbintjangan barang sekadarnja dengan menguraikan hal-hal jang mendjadi soal itu, sambil memperbandingkannja dengan kesusasteraan Djawa jang berkembang pada zaman jang lebih lama dari kesusasteraan Melaju.

序

インドネシア民族は文化水準と社会的背景を異にする頗る多くの種族に分れているが、彼等の多くはその文化的社会的発展の規模に応じそれぞれ固有の文学をもっている。そのうち最も高く評価されているものにマレー族のつくりだしたマレー文学とジャワ族のつくったジャワ文学がある。マレー文学はジャワ文学と異り、一般にインドネシア文学の中に包括して考えられるのが普通である。民族学的見地よりすると、マレー族はマラッカ半島を基盤として文化の発達をみた

とは言え、彼等の主流はスマトラに故地をもち、古来より交易を通じて西部インドネシア群島沿岸地方に定住し、インドネシア民族の主要構成分子を形成しているのであるから、このマレー族によりつくられた文学、すなわちマレー文学を総てのインドネシア人が呼んでいる如くインドネシア文学と称することは正しいと言える。しかし厳密な意味からすると、ジャワ文学と言えばジャワ族によりつくられたジャワ語による文学を指すように、マレー文学においてもマレー族によりつくられた Abdullah 時代（1796—1854）を含めたそれ以前の所謂前期インドネシア文学と称せられるものを、マレー文学と呼ぶ方が適当であると思われる。

ここでとりあげようとするのは、このような意味のマレー文学における発達過程に見られる問題点であって、インドネシア文学全般に及ぶものではない。マレー文学の発達の跡を辿り問題点を探りつつ、その実相を明かにするに当っては他の文学との比較によって考えた方がより明確にその真相を把握することが出来ると考えられるので、現存するマレー文学よりも更に古い時代において、かなり高い水準に発達を遂げていた古代ジャワ文学と対比しつつマレー文学の諸問題にふれてみようと思う。

I

マレー文学はジャワ文学と共に同じ次元の上に立って発達して来たインドネシアの代表的文学であるが、マレー文学はその発達過程においてジャワ文学と著しい時代的な隔たりがあるばかりでなく、文学の様相や性格の上においても相当大きい差異が見られる。現存する文学作品よりすると、マレー文学は回教の北スマトラ渡来以後にはじまり、固有文学を中心としてアラビア、ペルシャ、インド及びヒンズー・ジャワなどの多くの外来文学を採り入れ、17世紀より19世紀にかけて黄金時代をみたが、ジャワ文学ではこれより先11世紀より15世紀の間において、既にヒンズー文学よりの取材乃至は翻案により古代文学の全盛時代をつくり出している。従って文学の様相もマレー文学は回教的色調が強いのに対し、ジャワ文学はヒンズー色極めて濃厚で、特に古代ジャワ文学においてはヒンズー文学に対する知識なくしては、その精神を理解することは困難であると言われる。またマレー、ジャワの両文学は古い時代より互に影響し合って来たことも事実で、マレー文学は Hikajat Pandji Semirang をはじめ多くの Pandji 物語などジャワ文学より受けた影響も頗る大きいものがあることを見逃すわけにはいかない。

マレー文学とジャワ文学との間に見られる様相の差異は、既に述べたところにより明かな如くこれらの文学をつくり出したマレー族とジャワ族の古い時代の発展過程において、彼等が異った時代においてうけた外来文化の相違によるものであることは言うまでもない。勿論ヒンズー時代においてはヒンズー色の上に塗りつぶされていたジャワ文学にあっても、回教の侵入によりヒン

ゾー・ジャワ最後の王国となった **Madjapahit** 国滅亡（1478）後の文学、即ち中世ジャワ文学にはいと回教の影響をうけることが多い。従って回教渡来以後はジャワ文学もマレー文学と同じ程度にイスラムの影響をうけているように考えられ易い。しかしこの時代のジャワ文学においてはジャワ固有の性格が大きく台頭し、ジャワ文学に対するイスラムの影響はマレー文学に対する程深くは滲透していない。これは恐らく回教がジャワに伝来したときジャワ文学は既に高度に発達し、新来のイスラム文学よりも旧来のヒンズー・ジャワ文学に対してより一層愛着がもたれていたことによるものであろう。これに対しマレー文学では一般にイスラムの影響が深く滲透し、ヒンズーの影響は回教渡来以後にマレー語化されたものを通じてみられるに過ぎない。言い換えればそれが仮令ヒンズー文学の模倣であるにせよ、ジャワ文学の如くヒンズー時代に出た文学作品と言えるものが見られないわけである。マレー文学におけるこのような現象は回教がスマトラの **Pasai, Samudera** に渡来（1297）し、ついでマラッカに伝えられたとき——可能性ある推測の一つと言えることであるが——その当初において行われたヒンズー文化に対する激しい圧迫によって古来より伝えられて来たヒンズー・マレー文学は悉く潰滅したので、その結果イスラム文化がマレー族により受け入れられ易い状態におかれるに到ったという事情によって生じたものと推測される。いずれにしてもスマトラの場合とジャワの場合において考えられるこのように相反する二つの条件、即ちイスラムを受け入れ易い状況と受け入れ難い事情がマレー文学と回教渡来以後のジャワ文学に対するイスラムの滲透度に現在見られるような差異を齎したものと言えよう。では回教渡来以前のヒンズー時代において、推測される如くマレー文学は果して現存する古代ジャワ文学と並んで存在していたであろうかという疑問がおきる。若し存在していたと仮定するならばどうして当時のマレー文学作品が、古代ジャワ文学のその如く温存されていないのであるかということも問題の一つとしてとりあげられる。これらの問題を解くためには、まずマレー族がジャワ族と同じような時代において、また同じような程度においてヒンズー文化の洗礼を受けていたかどうかということについて考えねばならない。しかし文学の発達は人的要素と社会的要素を前提条件とするものであるから、それよりも前にマレー族はジャワ族と同様文字をつくり出す素質や才能をもち、文学をつくりこれを温存するに必要な社会的背景がそなわっていたかどうかを考えてみる必要があるであろう。

マレー族とジャワ族の発展の跡をみると、ジャワ族には優れた古い仏教遺跡が多く見られるばかりでなく、彼等は固有の文字をもちマレー族よりも古い時代につくった文学が見られることよりして、往々にしてジャワ族はマレー族よりも古い種族であると考えられがちである。しかしインドネシア民族の構成要素よりすると、マレー族もジャワ族も **Proto Malay** 乃至は **Deutro Malay** に属し、ヒンズー人渡来以前において両者ともに航海術、農耕術、天文学などにおいて

も既に高い水準にあった。彼等の祖先は新石器時代より青銅器時代にかけて繰返された東南アジア大陸よりの大規模な民族移動の波において、一はスマトラ **Djambi** 地方を中心として定着して **Melaju** 族と称し、他はジャワ中部より東部にかけて定住してジャワ族と呼ばれるに到ったもので、その起源よりすれば同一の **category** に入れられる。たゞマレー族の場合は紀元4世紀頃よりスマトラの **Palembang** を中心として興った **Sjeriwidjaja** 王国の勢力の拡大に伴い、多くは対岸のマラッカ半島に移住し、その原住民である **Negrito**や、これについて古い **Sakai, Semang** などの各種族を駆逐して後に到り王国を建設したもので、ジャワ族が屢次に及ぶ海外制覇にも拘らず、結果からみればジャワ島内における王国の興亡に終始したのとは発展の趣を異にしている。

古来よりマレー族は如何に海外発展の気象に富んでいたかは、彼等のマラッカ半島進出に伴いその王国である **Sjeriwidjaja** 国の覇権が南海多島海西部地域に拡大するに及び、その国語であるマレー語も版図全域に拡がり、**Sjeriwidjaja** 国の没落（14世紀中期）後といえども、当時既に航海者又は交易商人としてインドネシア群島内に深く進出していたマレー族によりその言語も広く伝えられ、はじめマレー族を指すために用いられた「マレー」という言葉は、やがて南海多島海の各島嶼に住む全土着民又は群島そのものを指すために用いられるようになった事実をみても明かである。**Sjeriwidjaja** 時代におけるマレー族のこの偉大な発展の跡をジャワ族のそれと較べるとき、インドネシア史上に現われたジャワ族も12世紀においては、**Kediri** 王国がインドネシア東部地域を制圧し、13世紀には続いて興ったヒンズー時代最後の王国と言われる **Madjapahit** 国も、現在のインドネシア領全域にブルネイ、マラッカ半島、ニューギニアをも加えた頗る広大な地域に覇をとなえるなど、時代的にはマレー族の発展よりもやや遅れているけれども、彼等の軍事面における素質や能力も決してマレー族に劣るものではないことを示している。たゞジャワ語は、マレー語の如く普及力がなく占領地域において後世に伝えられていないのは、ジャワ語のもつ性格によることは明かであるが、それ以外にジャワ族の当時の海外発展は軍事第一主義であったのに対し、マレー族の場合は当初の軍事的意図から後に商業的意図に変わったことによるものであらうと考えられる。いずれにしても現在見られる歴史的事実や文化の様相よりすれば古代ジャワ人はヒンズー文化を巧みに採り入れ、異色ある古代ジャワ文学や芸術をつくり出すことに成功している。これに対しマレー人は文学や芸術よりも寧ろ航者乃至は交易商人として大きい足跡を残している。このような事実からジャワ人の才能の特質は文学や芸術など審美的教養にあり、マレー族のそれはより实际的な面にあったと考えられるのも蓋し当然の理と言えよう。

しかしこれは現存する歴史的事実を基底とした推断であるから、視野を現存する歴史的事実に限定した場合においては確かに正しいと言えるであらうが、古い時代における歴史的事実として認めることが出来る文学作品や美術建築などの多くは亡滅して現存しない場合が頗る多いことを

思えば、この現存する歴史的事実のみによって直ちにマレー人は实际的であり、ジャワ人よりも審美性に欠けていたと判断することは、古い時代の歴史的事実が明かでない場合が多いインドネシアに関する限り頗る危険である。古い時代におけるマレー族とジャワ族にみられる性格や才能の特質上の相違を考えるには、蓋然的ではあるが合理的な推測の基盤として地理的条件や、それに由来する社会的背景を等閑視してはならない。何故ならばこれらの諸条件こそ彼等の性格や才能の特質を形成する上において大きい役割を演じているからである。ではこの地理的条件及びこれに由来する社会的背景はスマトラやマラッカとジャワの間ではどのような相違が見られるであろうか。

古い時代においては現在呼ばれているジャワやスマトラは、これを区別しないで両地域を合して一つの名称で呼ばれていたようで、古代文献をみるとジャワ乃至はスマトラを指す地名として Ramayana には“Yava”とあり、後漢書には「葉調」、Ptolemy の天文地理書には“Iabadiou”，更にまた法顯伝には「耶婆提」という地名がそれぞれ見られるが、これらの名称はスマトラを指すのか、ジャワを指すのかは明かでなく大体同一地名を意味するものと考えられる。従ってこれらの文献を通じて古代のジャワとスマトラの相違を知ることは不可能である。しかし Sjeriwidjaja 王国の中心地である Palembang は Musji 河に臨み、ヒンズー時代においてはインドへの交通の要衝に当たっていたことが中国の文献で明かであり、また他方マラッカ王国の首都であるマラッカも東西貿易の中継地点に位置し、回教時代にはいつて開港市場として隆盛を極めていたことなどよりしてマレー族の多くは当時既に商業に携わり、一般に彼等はその影響を受けて實際面に優れた才能の特質をもっていたものと考えられる。これに反しジャワは古い時代から地理的にも海外交易の中心より離れていたため、ジャワ族は實際面より影響をうける機会がマレー族に比して少かったことだけは確かである。このように地理的条件より由来する社会的背景の相違から、マレー族とジャワ族ではその性情や才能の特質の間に差異が生じたと考えられることは至極尤もなことであるが、しかしマレー族の性能や才能の特質が商業的乃至は实际的な面に優れていたからと云って、彼等はヒンズー時代において文学をもたなかったという理由になるかどうかは疑問である。これはマレー族がヒンズー時代においてその王国である Sjeriwidjaja に仏教研究の中心地をもち、回教渡来以後においてまもなく固有文学をつくり出しているという事実からすれば、その疑問に対する解明はこれ以上述べる必要はないであろう。それで結局地理的条件より由来する社会的背景を考慮に入れながら、歴史的事実に従うことになるが、問題は古代におけるマレー族やジャワ族の社会が歴史的事実、言い換えれば文学や芸術を後世に伝える状態にあったかどうかということにあると思う。これに対する解明がなされて、はじめて歴史的事実の基盤の上になつてマレー族とジャワ族の間における才能の特質や性格の相違を論じ、ヒンズー

時代におけるマレー文学存在の有無について言及することが可能となる。しかしこの問題は歴史的な事実を形成する外來文化が、マレー族の社会とジャワ族の社会の間において、それぞれどのような形で発達し、後世に伝えられて来たかを考える過程において明かとなるであろう。

II

インドネシアに押寄せて来た外來文化のうち、民族文化の発達の上に最も大きな役割を演じているものにヒンズー文化とイスラム文化がある。現在イスラム教はバリー島及びその附近の小島を除いては、インドネシア及びマラヤの殆ど全域に弘布されているが、イスラム教が伝播する以前はジャワ、スマトラ、ボルネオなどインドネシア西部地域及びマラッカ半島においては、ヒンズー人により齎らされたヒンズー文化が支配的であった。Dr. F. W. Stapel はその著 *Geschiedenis van Nederlandsch Indië* において、紀元1世紀頃にはインド及び中国などより多くの商賈がインドネシアに渡来したが、就中ヒンズー人でスマトラ、ジャワ、ボルネオなどに定住する者が最も多かったと述べている。一方マラッカ半島への彼等の移住も紀元200年頃には既に盛んに行われていたことを、R. O. Winstedt はその著 *Tawarikh Melayu* において明かにしている。これら二氏の見解を総合すると、インドネシア西部地域及びマラッカ半島へのヒンズー人の渡来は概ね紀元前後より行われていたものと考えられる。彼等の齎らしたヒンズー文化の影響は F. W. Stapel が指摘している如く、特にスマトラとジャワにおいて深くその跡をしるしているが、現存する歴史的な事実スマトラの場合とジャワの場合では、その内容を異にするばかりでなく発達の時代にも隔たりがあることを示している。

ヒンズー文化の偉大な足跡は、ジャワでは8世紀より10世紀の間に建立されたとされる Borobudur をはじめ、Tjandi Kalasan, Tjandi Plohasan, Tjandi Mendut, Tjandi Pawon, Tjandi Sevu, Tjandi Lara Djongrang など、Plambanan 平原に点在する寺塔精舎や、Singasari 王国 (1222—1292), Madjapahit 王国 (1292—1478) などヒンズー・ジャワ末期において Surabaya 南方に建立された Tjandi Panataran, Tjandi Djago, Tjandi Singasari などの雄大な仏教遺跡に見られるばかりでなく、文学の面でも Ramayana より古代ジャワ語に翻案した Kakawin Ramayana をはじめ、同じく Ramayana や Mahabarata より取材した多くの散文や叙事詩のほかに、法律、歴史、哲学などの多数の文献において、彼等の影響力が如何に大きいものがあったかを知ることが出来る。これに対しスマトラ、マラッカ半島、ボルネオなどでは、これらの地方の文学や芸術にヒンズー文化の面影が明かに見られないという理由で、マレー族は一般にヒンズー文化の影響を殆ど受けていないかの如く考えられがちである。しかし彼等の母語であるマレー語の中には極めて多くのサンスクリットが混入しており、これを取除いた固

有のマレー語のみを以てしては、完全な意思の疎通をはかることは不可能であるという事実を考えると、古い時代においてはマレー人の生活が、如何に強くヒンズー文化と結びついていたかを知ることが出来る。そればかりでなく中国の古代文献や南部スマトラ地方より出土した刻文よりすると、マレー族の故地であるスマトラにおいても、紀元7世紀頃には仏教を中心としたヒンズー文化が、寧ろジャワよりも隆盛であったことが明かである。古い時代の中国におけるインドネシアに関する記述のある文献の主なものに、「南海寄帰内法伝」、「大唐求法高僧伝」、「新唐書」、「冊府元龜」など多くの史書がある。このうち「南海寄帰内法伝」4巻及び「大唐求法高僧伝」2巻は、学僧義浄が紀元671より684年の間に3回に亘り Sjeriwidjaja（室利仏逝、尺利仏逝）を訪れたとき、その地で逗留中に書いたものであるが、彼はこれらの史書をやはり同じ Sjeriwidjaja において翻訳した「経論」10巻と共に、天授3年（692）同地から唐に帰る大律師に托して則天武后に進献したといわれる。当時 Sjeriwidjaja は Djambi 地方にあった Melaju 王国（末羅遊、末羅瑜）を併合して、南海多島海西部地域に覇権を確立した頃で、その首都（概ね現在の Palembang 地方）は仏教とサンスリット研究の中心地として栄え、義浄をはじめ多くの中国の学僧がインドへの渡航の前後、この地において学んだのも故なしとしない。この時代の模様を伝えるものに、また古体マレー語を Pallawa 文字で表わした4つの刻文がある。第1の刻文は南部スマトラの Palembang に近い Kedukan Bukit より出土した683年の記銘を有するもので、第2の刻文は Palembang 西方5キロの地点にある Talang Tuwo より発見され684年の記銘がある。第3と第4の刻文は同一のもので、686年の記銘を有し、一つは Bangka 島の Kota Kapur から、他の一つはスマトラの Djambi 地方、Batang Hari の支流にある Karang Brahi で出土している。これらの刻文はいずれも683年より686年の4年間に及ぶもので、この時代は義浄が第2回目に滞在した頃（685—689）に当り、ジャワ島への遠征、放生園の創設などその全盛時代の模様を伝えている。これらの刻文と言い、さきに述べた中国の古代文献と言い、スマトラ地方にもヒンズー文化の影響が如何に大きくその跡をしるしているかを示すものといえよう。

このようにマレー族とジャワ族では、ヒンズー文化の影響をうけて発展した時代の上において隔たりがあるばかりでなく、その発展の跡を物語る歴史的事実においても、ジャワ族の場合は多くの仏教遺跡と多彩な古代文学があり、これを通して古代ジャワの実相を把握することが出来るのであるが、マレー族の場合は僅かな刻文と中国の文献により Sjeriwidjaja 時代の模様を窺知することが出来るに過ぎない。ではスマトラとジャワでは古代文化の実相を伝える歴史的事実の上に、どうしてこのような大きい差異が生じたのであろうかと言うに、先ず仏教遺跡であるが、ジャワの寺塔精舎が現在なお往時を偲ぶにたる偉容を残しているにもかかわらず、スマトラにお

いては **Sjeriwidjaja** の盛時を偲ぶ仏教遺跡はいずれも 廃趾となっている。これは ジャワの寺塔精舎は石造建築であるのに対し、スマトラのそれは軀造であったからスマトラの寺院精舎は時の嵐に堪えることが出来なかったものと考えられる。この事実は建築資材の耐久性の上からみて首肯出来るとして、文学については、スマトラの場合はたしてあの強大な国力と盛大な仏教文化を誇ったマレー族が、現在一般に考えられている如くヒンズー時代においてマレー文学をもたなかったと解してよいであろうか。仏教遺跡と文学を同じように考えることは出来ないけれども、古代マレー族の性情や能力を示す歴史的乃至は考古学的事実からみて、彼等にも古代ジャワ文学のそれとは様相を異にするかも知れないけれども、何等かの形における文学があったに違いないと推察される。若し事実そうであったとすれば、古代ジャワ文学は今なお依然として存在しているにも拘らず、**Sjeriwidjaja** 時代のマレー文学は現在どうして見られないのであろうか という疑問がおきる。しかしこの問題については古代ジャワ文学がどのようにして現在まで伝えられて来たかを考えてみれば自から解明が与えられるであろう。

古い時代においてはジャワやスマトラ、マラッカでも王がその治世を後世に伝えるために優れた文学者を王宮においた。従って文学は王宮を中心として発達した。殊にジャワでは **Mataram** 王国の **Dharma Wangsja** (991—1006) や **Airlangga** (1019—1042), **Madjapahit** 王国の **Hajam Wuruk** (1350—1389) などの諸王が文学を愛好して大いにこれを奨励したことや、また 10世紀以後 **Mataram**, **Kediri**, **Singasari** 及び **Madjapahit** など各王国の中心が、その興亡幾変遷にもかかわらず常に東部ジャワにあったことなどにより、古代ジャワ文学は東部ジャワを中心として黄金時代を現出したのであるが、やがて15世紀の中葉イスラム教が中部ジャワ地方に侵入しはじめるや、古代ジャワ文学は亡滅の危機に曝されるところとなった。しかし幸にして古代より東部ジャワと一体不可分の関係にあり、現在に到るまでヒンズー教を奉じてイスラム教の侵入を拒んで来たバリ島において、古代ジャワ文学は温存せられて来たばかりでなく、ヒンズー・バリ文学として新たな発達をみるに到った。イスラム教が自己の *adat* に合致しないヒンズーの法規に対して如何に苛酷であったかは、バリ島に温存せられて来たものを除いては、古代ジャワ文学は **Madjapahit** 王朝の崩壊に当り、東部ジャワ地方よりその跡を断ったのをみても明かである。古代ジャワ文学は **Madjapahit** 王朝の滅亡を転機として新しい様相を呈することになったが、これは文学に用いられる言語が **Kawi** 語から中世ジャワ語に変わったことを意味するばかりでなく、詩の形態においても **kakawin** から **kidung** に変わったことを意味するもので、かかる様相の変化は単に外観上からだけではなく、その内容においてもイスラムの侵入を契機として、古代ジャワ文学は従来のヒンズー的色調からジャワ固有色豊かな文学へと移行している。このような事実によってイスラムのヒンズー・ジャワ文学に対する破壊活動が如何に熾

烈であり、またその影響も頗る大きいものがあったことを知る事が出来るであろう。ここで当然考えられることは、イスラム教は15世紀に到り、かつてマレー族の仏教文化の中心地であった南部スマトラに侵入しているが、このときはたしてヒンズー・マレー文学に対する破壊活動が行われなかったと言えるであろうか。尤もイスラムの侵入以前の紀元1377に Sjeriwidjaja 王国はジャワの Madjapahit 王国により征服されているので、恰も8世紀中葉における Sjailendra 王朝の中部ジャワ進出が、中部ジャワにあった当時のジャワ文学の亡滅を齎した如く、このとき既に多くのヒンズー・マレー文学が亡滅したとも考えられるが、いずれにしても Sjeriwidjaja において、Madjapahit におけるバリ島のような古代文学の温存地があったとするならば、古代ジャワ文学が現今見られるが如くヒンズー・マレー文学なるものも存在しているに違いないと思われる。

ヒンズー時代におけるマレー文学の存在に対する可能性はこのように極めて大きいけれども、現実の問題としてヒンズー時代のよすがとなるものは、現在みられるマレー文学では伝説、説話、Pantun などを通じて僅かばかり探ることが出来るに過ぎない。また Hikajat Sang Boma, Hikajat Pandawa Lima, Hikajat Seri Rama などその起源をインドの古典 Mahabarata や Ramayana にもつヒンズー・ジャワ文学よりマレー語化された多くの作品も見られることは事実である。しかしこれらの作品は内容自体乃至はその時代性の如何を問わず、マレー語化された年代は新しく歴史性をもたないから、これらの作品をもってヒンズー時代にマレー文学が存在していたことを論証することは不可能であると言わねばならない。

III

ヒンズー時代にマレー族は文学をもたなかったかどうかという問題と並んで、他の大きい問題の一つとしてマレー文学は、文学史が成立するかどうかという問題がある。言い換えればマレー文学は発達して来た跡を歴史的に体系づけることが出来るかどうかという問題である。これを明かにするには、まずマレー文学全体を体系づける条件がその文学作品にそなわっているであろうかということを考えてみなければならない。

現在みられるマレー文学は宗教書に始まり、散文は Hikajat を以て代表せられ、詩歌は Bidal, Pantun, Gurindam, Sjair などの形をもって多彩な文学図絵を繰広げているが、マレー文学に近代西欧文学思想を導入し、新紀元を劃した Abdullah bin Abdul Kadir Munsji (1796—1854) が現われるまでの一連の作品には、それが外来文学における翻訳年代についてはもとより、固有文学においても Hikajat Radja-radja Pasai, Sedjarah Melaju などを除いては、著述年代を明かにしがたい。このような現象は古い時代のジャワ文学でも見られるが、古代ジ

ジャワ文学では *tjandra sengkala* と云って数字の意味をもった言葉を用いて著述年代を表わす。

この方法によると、用いる言葉自体に多くの意味があって正確に解釈することが困難な場合が多いと言われる。著述年代ばかりでなく、著作者の名を明かにしているものがないというのも古い時代におけるマレー文学の特色の一つである。この現象もマレー文学だけに限られたものではなく、古代ジャワ文学においても宮廷文学者による若干の作品を除いてみられるところで、著作者の名を明かにするようになったのは、ジャワ文学でも1830年以後のことと言われ、マレー文学においてはAbdullah の時代にはいって漸く著者は自分の名を明かにするようになった。前に述べた *Sedjarah Malaju* と並んでマレー文学のうちで大作と言われる *Hikajat Hang Tuah* は著者が誰であるか不明であるし、また *Sedjarah Melaju* にしても古い時代の他のマレー文献と同様著者の名を明かにしていない。しかし巧妙なその文体並びに筆致、王宮の事情や政治活動に関する多彩な内容よりして、マレー史家 W. G. Schellabear, C. Hoykaas, R. O. Winstedt などは *Tun Sri Lanang* を作家と仮定しているが、その後の研究において R. O. Winstedt は *Tun Sri Lanang* 説に疑義をはさんでいる。古い時代においては文学作品にどうして著作者が自分の名をしるさなかったかという根本理念は、彼等の生活基準である村落共同体の *adat* によるものである。この *adat* によれば特定のもを除く一般の財産については私有を認められず、すべて自分の属する社会の共同財産と見做されるので、文学作品なども共同体の財産として考え、著者は自分の名を表わさなかったのである。

それで著述年代や著者の名が文学作品に明かにされていないというような場合には、その言語、文字、文体及び内容などにより文学作品が生れた時代を鑑別することになるが、マレー語では最も古い文学書にも古体マレー語と言えるものではなく、たゞ既に述べた如く *Sjeriwidjaja* 王国時代の刻文にのみ、南インドの *Pallawa* 文字で書き表わされた古体マレー語をみることが出来る。この古体マレー語がどうして刻文のほかに書かれたものが見られないかというわけについては、前節において述べた古代マレー文学が見られない理由について考えれば自から明かになるであろう。更にまたメナンカバウ族、バタック族、アチェ族、スンダ族、マヅラ族、バリー族、マカッサル族、ブギス族、ミナハサ族などマレー族と比較して、ヒンズー時代決して有力であったとは考えられない種族でさえも、いずれも固有の言語と *Pallawa* 文字よりつくり出した固有の文字をもっていることを思えば、イスラム教渡来以前の古い時代においては、マレー族はその文学を書き表わすために、一般に古体マレー語を用いていたと考えても決して不思議ではない。たゞ現実の問題として *Sjeriwidjaja* 時代の言語にしても、またこれを書き表わす *Pallawa* 文字にしても僅かな刻文以外に存在していないので、マレー語を表わすために用いる文字としては現在見られるアラビア文字とローマ字以外にはないことになる。これら二種の文字をもって表わされた

マレー語における時代差にも格別大きい隔たりはなく、たゞ作品の内容や文体により蓋然的な時代差を知ることが出来るに過ぎない。この点古代におけるジャワ文学は、これを書き表わすのに Kawi 語と Kawi 文字があった。Kawi 文字は一般に Dewa Nagari より由来するものと考えられているが、R. S. Sastrowingnjo はその著 Djawa Kuno において Kawi 文字は Pallawa 文字に変化を加えてジャワ化したものであることを明かにしている。事実字形は Dewa Nagari よりも Pallawa に近い。その後ジャワ族はこの Kawi 文字に更に若干の変化を加えて新ジャワ文字をつくり出している。

文学の上では Kawi 語で書かれた作品はいずれも Madjapahit 王国滅亡(1478)以前のもので、これを古代文学に入れる。これに対し Mataram の Sunapati 時代(1586—1601)並にそれ以後の中世ジャワ語で書かれたものを中世ジャワ文学に入れる。Dr. R. Ng. Purbatjaraka によると、中世ジャワ語は Singasari 王国(1222—1292)の勃興した頃には既に社交語として広く用いられているので、中世ジャワ語で書かれた作品のうちには古代文学に当然入れられるべきもので、著作年代の明かでないものが多いと云われる。また Kawi 語で書かれた同じ Kakawin Ramayana においてさえ、その時代判別において R. Ng. Purbatjaraka は9世紀頃の作品であると言い、H. Kern は13世紀に著述されたと主張するなど著述年代の識別にかなり大きい意見の相違があることを示している。ジャワ文学ではこれを表わす言語が Kawi 語と中世ジャワ語に分れているので、マレー文学よりも容易に文学作品の著述年代を明かにすることが出来るように思われるけれども、上述の如く古い時代の文学作品のうちには著述年代の差異を鑑別し難いものも少なく、結局はマレー文学の場合と同じように文体及び内容などから蓋然的な著述年代を明かにすることが出来るに過ぎないものが多い。

IV

Abdullah 時代(1796—1854)までの現存するマレー文学には、蓋然的にも著述年代を明かにすることが出来る作品は少い。パリーで Dubenier により上梓された Hikajat Radja-radja Pasai はマレー文学作品のうちでは最も古く、1450年に書かれたのであるから回教がスマトラ北端の Pasai, Samudera に伝来した13世紀末よりすると、それから約1世紀半後に固有の作品が生れたことになる。しかしこれはマレー文学のはじまりを意味しない。回教渡来当初には回教の教理乃至は儀律を説いた Kitab Risalah をはじめ、Hikajat Nabi Muhammad, Hikajat Amir Hamzah その他多くの回教関係の翻訳書が出ていたと考えられる。特に Hikajat Amir Hamzah はマホメットの叔父にあたる Saidina Hamzah の武勇に関する物語を内容とするもので、Alfonso d'Albuquerque の率いるポルトガルの艦隊がマラッカを攻略したとき(1511),

マラッカを守備するマレーの将兵たちにより士気を鼓舞するために愛読されたとされるから、既に14世紀頃からこれらの翻訳書は出ていたものと推測して間違いないが、スマトラの Pasai, Samudera で翻訳されたものか、それとも Malaka でマレー語化されたのかは明かでない。R. O. Winstedt はその著 Tawarikh Melayu において、マラッカ半島で回教を奉じた最初の王は Sultan Muhammad Shah で、彼は1403年に即位し1414年に亡くなったことを明かにしている。この事実よりすると、回教がマラッカに広く弘布されるようになったのは、スマトラの Pasai, Samudera に伝来してから約1世紀経過してからのことであろう。従って上に述べた如き回教関係の翻訳書のうち、あるものは、回教がマラッカに広く流布する以前に Pasai, Samudera でマレー語化されていたと考えられる。このマレー文学の発生期をジャワ文学のそれと比較すると、ジャワ文学では紀元820年より832年に到る12年間で東部ジャワに君臨していた Dyah Balitung 王の命により Mpu Yogiswarman が Ramayana より翻案した Kakawin Ramayana が最も古い文学作品であると一般に言われているが、R. Ng. Purbatjaraka は Kitab Tjanda Karana の方が古く、恐らくこれは760年頃に出たものでジャワ最古の文学作品であるとみている。古代中部ジャワ時代の文学作品は亡滅したものが多いと言われるが、概ねこれらの文学作品をジャワ文学の発生期とすると、ジャワ文学は現在見られるマレー文学よりも6-7世紀古い歴史をもっていることになる。

14世紀に発生期をもつ現在のマレー文学は17世紀にはいると、Sedjarah Melaju, Hikajat Hang Tuah, Hikajat Radja-radja Kedah, Silsilah Keradjaan Kutei その他多くの固有文学がスマトラ、マラッカ半島、ボルネオなどから生れるが、このうち武勇伝 Hikajat Hang Tuah を除いては、すべて王の系譜的な記録や政治上の出来事を記した単調な史学的文献に過ぎない。この単調さに変化を与えてマレー文学に黄金時代を現出せしめたものは、アラビア、ペルシア、インドなどの西方系外来文学とヒンズー・ジャワの東方系外来文学である。これらの外来文学のマレー語化は欧人の齎らしたローマ字により一段と促進されたが、欧人との接触は外来文学のマレー語化から一步進めて、従来の宮廷文学に終止符をうち欧人の近代文学思想をとり入れた Abdullah 文学の出現へと発展するに到った。一方ジャワ文学は11世紀にはいると、インドの古典 Mahabarata や Ramayana に取材した多くの作品が生れたが、就中 Mahabarata に取材した叙事詩 Ardjunawiwaha や Bharatayudaha、或は Ramayana より翻案した散文 Utarakanda などは代表的作品と云えるであろう。古代ジャワ文学は東部ジャワを中心として11世紀より15世紀にかけて黄金時代をみたが、その作品は主としてサンスクリット文学よりの取材が翻案によるものであるところに特色が見出される。しかし回教がジャワに侵入(15世紀)してからのち、ジャワ文学は固有色豊かな文学へと発達したが、やがてオランダ人のジャワ来航(1596)

は近代西欧文学思想を齎らし、ジャワ文学史上に新紀元を劃することとなった。

いまマレー文学の発達をジャワ文学のそれと比較してみると、マレー文学では翻訳文学の発生より固有文学が出る迄約1世紀半を経過しているに過ぎない。ところがジャワ文学では **Madjapahit** 王朝の末期まで約7,8世紀の間ヒンズー文学よりの取材乃至は翻案に終始して来たのであるが、この両者の差異は何を意味するであろうか。彼等が始めて接した外来文学に対する愛着の程度、アラビア、ペルシャ文学とサンスクリット文学の深さの差異などもその理由として考えられるであろうが、マレー族の場合はヒンズー時代においてかって文学をもっていたのでそれが亡滅した後においても伝誦文学などの形において、文学に対する思考的訓練が常に行われていた。このことが固有文学の出現を早めたと考えられる。固有文学の発生と言い、近代西欧文学思想の影響によるブルジョア文学の発生と言い、マレー文学もジャワ文学と同じようにいくつかの転換期を経て現在に到っている。しかしこれらの転換期はマレー文学とジャワ文学とでは、その発達過程を時代的に体系づける場合の重要度において頗る大きい相違が見られる。古い時代のジャワ文学は通常 **Madjapahit** 王国の没落(1478)を転機としてそれ以前を古代文学とし、それ以後を中世文学と呼ぶ。古代ジャワ文学は更に又 **Kakawin Ramayana** などが出たと考えられる古代中部ジャワ時代(750—927)、有力な文学作品が出たけれどもその多くは亡滅したと云われる古代東部ジャワ時代(928—1006)及び **Kediri**, **Singasari**, **Madjapahit** などの各王国を中心として古代ジャワ文学の黄金時代を現出した東部ジャワ時代(1007—1500)に分けることが出来る。これらの時代区分は王国の興廃を転機とする社会的背景を基底としていることはいうまでもないが、就中古代文学と中世文学の転換期においては社会的背景のほかに、言語や詩形に変化が見られるばかりでなく、サンスクリット文学の翻案から脱皮してジャワ固有の性格が文学作品に強く表われるようになったという意味において、他のいくつかの転機に比して最も大きい意義をもつものである。この点マレー文学にみられる固有文学の出現は、社会的背景や言語のうえからみても単なる固有文学の発生に過ぎず、あらゆる角度からみてマレー文学を時代的に体系づけるための転機とはし難い。

固有文学の発生以後マレー文学は **Sedjarah Melaju. Hikajat Hang Tuah** に始まる一連の固有文学を中心として、多くの外来文学をとり入れ新時代への転機を劃した **Abdullah** 時代に到っている。これがインドネシア文学者の称する前期インドネシア文学で、**Abdullah** 時代以後のジャワを中心として新らしい発達を遂げた所謂後期インドネシア文学は、純粋な意味でマレー文学とは言い難い。**Abdullah bin Abdul Kadir Munsji** の出現がマレー文学の発達過程に時代転換の契機をつくり出したことは疑いをいれないところであるとして、たゞ **Abdullah** 出現以前の古い時代を更にいくつかの時代に小さく分けることは出来ないものであろうか。ジャワ文

学では王国の興亡という社会的背景が文学を時代的に体系づける 大きい 要素の一つになっている。マレー文学においてもマラッカ王国の存在は 確かにマレー 文学発達の 基盤を 形成しているが、ジャワ文学の場合と異り王国の興亡という背景をもたないマレー文学にあっては、これを時代的に体系づけるための重要な要素の一つを欠いていると言わねばならない。この面からばかりではなく、言語、文体、内容などの上からもマレー文学全体を時代的に区分することは頗る困難であることは既に明かにした通りである。このように一貫した時代性を与え難い要素を多分にもったマレー文学においては、寧ろ平面的に、言い換えれば種類の上から固有文学と外来文学に分け、固有文学は更に民間の伝誦文学と王宮の筆記文学に分ち、外来文学はその由来よりしてアラブ、ペルシャ、インドの西方系とヒンズー・ジャワの東方系に分けてその各々の上に立って時代性を考えた方が妥当であろう。

主 な 参 考 文 献

- Drs. S. Wojowasito : Sedjarah Kebudajaan Indonesia.
Zuber Usman : Kesusasteraan Lama Indonesia.
B. Simorangkir-Simandjuntak : Kesusasteraan Indonesia.
R. S. Sastrowingnjo : Djawa Kuno.
Gazali B. A. Langgam Sastera Lama.
Dr. R. M. Ng. Purbatjaraka : Kepustakaan Djawa.
L. Mariatmo/A. Mitramartapa : Sedjarah Ringkas Indonesia.
R. O. Winstedt : Tawarikh Melayu.
R. J. Wilkinson : History of Malay Literature.
St. Takdir Alisjahbana : Puisi Lama.
F. W. Stapel : Geschiedenis van Nederlandsch Indië
Ensiklopedia Indonesia
本学蔵書 : 大蔵經
全 上 : 新唐書
全 上 : 後漢書
石田幹之助著 : 南海に関する交那史料